

法助動詞と待遇表現

三 宅 亨

は じ め に

日本語にはインドネシア語、タイ語、朝鮮語などとともに豊富な敬語があるけれども、英語には敬語はない、というような指摘が時折なされることがあるが、はたしてそうであろうか。たしかに日本語や朝鮮語を習得するうえで敬語の難しさに悩まされることは事実である。母国語話者である我々でも日常生活の中でしばしば日本語の敬語の難しさに頭を悩ます。これにひきかえ英語には、日本語のように複雑な、体系だった敬語がみられないので、英語には敬語が存在しない、というような結論が導き出されるのであろう。

しかし、どのような言語であろうと待遇表現をまったく欠いているということとはありえない。ここでいう待遇表現とは、「話し手が相手との社会的・心理的距離に応じた心理的態度を表わす言語手段」¹⁾をさす。社会的な地位関係、年齢差、場面・状況により、言葉の丁寧さの度合いが変わり、相手との心理的な距離により使用する言葉が異なる。すなわち相手に応じてスピーチ・レベルが変化する、という点では英語も例外ではない。

敬語とは、尊敬語、謙譲語、丁寧語、などと分類され、待遇表現の中でも、特に相手との社会的・心理的距離が大きい場合に用いられる言語手段を指す、と解してよかろう。待遇表現を考察する際には、逆にこの距離が小さい親密表現をも見逃してはならない。後で取り上げるように、英語の場合にはこの親密表現が対人関係において重要な役割を果たすのである。

英語の待遇表現の手段は、音調・語彙・統語形式などの様々なレベルにお

いて認められるが、本稿では法助動詞 (Modals) の使用を中心に考察を試みる。

1

法助動詞は、通例 deontic modal (義務的法助動詞) と epistemic modal (認識的法助動詞) の2種類に大別されるが、ほとんどの法助動詞がこの二つの意味を持っているので、具体的な使用場面を与えられても意味の曖昧さが生じることがある。例えば、(1)の文は(2a)(2b)の二つの読みを許す。

(1) John *must* stay at home on Wednesday.

(2) a. John is obliged to stay at home on Wednesday.

b. It seems certain that John stays at home on Wednesday.

(2a)の読みは *must* を deontic modal と解釈したものであり、(2b)は *must* を epistemic modal と解釈したところから生じる。

筆者は、十数年前にアメリカ人の交換留学生の世話をした時に、後日その学生の母親から丁寧な礼状を頂いたが、その中に、

(3) When you come to the States, you *must* come and see us.

と書かれているのを見て驚いたことがある。瞬間的に、「*must*=... ねばならない(義務)」と単純に解釈してしまったのである。後述(1.5)するように、この場合の *must* は「ぜひ... して下さい」という丁寧な勧誘表現である。

Quirk (1982:47) は、法助動詞は母国語話者間のコミュニケーションにおいてさえ齟齬をきたしやすい (liable to cause difficulty in communication even between native speakers) と述べている。

以下この項では、法助動詞を一つひとつ取り上げ、待遇表現との関連をみることにする。

1.1 CAN

Can には deontic modal としての「能力」「許可」の意と epistemic

modalとしての「可能性」の意がある。

まず、「能力」の意からみていくと、

(4) a. *Can* you speak English?

b. *Do* you speak English?

の二つの文はいずれも相手が英語を話すかどうかを尋ねているが、*can* を用いた(4a)は相手の能力を尋ねるものであるのに対し、*do*を含む(4b)の文は単に相手が話すか否かという事実を問う文である。この場合、相手の能力に疑問をはさむような(4a)の文は相手に礼を欠くことになり、(4b)の文を用いるのが社会的にはかなっている。

Can は、主語の行動を妨げるものは外部の状況の中に存在しないという話し手の判断を表わし、行動の自由を意味する。²⁾ この *can* は一般に「許可」を表わすのに用いられる。

(5) *Can* I borrow your pen?

かつては、許可を求める際には “*Can* I ...?” ではなく “*May* I ...?” というように子供たちは教えられたが、今日の日常会話 (colloquial English) では *can* のほうが広く用いられ、大抵の場合は *can* と *may* との意味の差はほとんど無視しても構わない。しかし、改まった丁寧な用法 (formal and polite usage) としては、話し言葉においても書き言葉においても、*can* の使用は避けられ、*may* が適切であるとみなされている、と Leech (1971:70) は指摘する。

(6) You *can* smoke in this room. (You are allowed to...)

について、彼はこの場合の *can* は “The rule allows it” を意味し、次のような場面では *can* の代わりに *may* を使用することは出来ないという。

(7) MR. X: *Can* I smoke here?

MR. Y: So far as I know you *can* —there's no notice to the contrary.

この「行動の自由」という意味の延長として、平叙文で用いられた *can* が「申し出・提案」を表わすことがある。

(8) We *can* send you a map, if you wish.

また, Leech (1971:70) は次のような文に注目している。

(9) Mike and Willy, you *can* be standing over there; and Janet *can* enter from behind that curtain.

これは演出家が俳優に向かって指示を与えている場面であるが、この演出家は「話し手の（許可を与える）権限」ではなくて、*can* の持つもうひとつの意味である「可能性」を前面に押し出すことによって、命令の意味を和らげ、提案の体裁を整えている。Leech はこれを「民主主義的命令文 (democratic imperative)」と呼んでおり、この表現は、自分が対等とみなす相手に対して用いられる。この *can* を含む文の命題内容が (11) のように相手にとって望ましくないものであれば、「命令」の意が強くなる。

(10) The telephone rang. His wife.

“Yes,” he said. “You *can* start dinner. Leaving now. Bye.”

—J. Brady, *The Press Lord*

(11) You *can* clean the table now.

1.2 COULD

Could は *can* の単なる過去形ではなく、それ以上の意味をもつ。Could に限らず、法助動詞の過去時制は表現を間接的かつ婉曲にする効果があるので、主に語用論のレベルで敬意表現として多用される。³⁾

まず、平叙文で「申し出・提案」を表わすのに用いられる。

(12) I *could* do the shopping for you, if you're tired.

(13) I *could* get you a copy (if you want one).

—Thomson & Martinet (1986:135)

話者にはそれだけの能力があり、その行動を妨げるものはありませんが、あなたの気持ちはいかがでしょうか、という含みがある。

疑問文で「許可」を求める表現として用いられることがある。

(14) *Could* I use your phone?

これは canを用いた場合よりも丁寧な表現であるが、(14)に対し、could を用いて許可を与えることは出来ない [Swan, 1980:131]。

(15) Yes, of course you $\left\{ \begin{array}{c} \text{can} \\ * \text{could} \end{array} \right\}$.

“Could you ...?” の形で「依頼」を表わすことがある。

(16) *Could you please show me the way?*

(17) *Could you keep your voice down, please?*

(17)の発言は筆者がカナダに滞在している時に、ガイドの女性が観光客に注意しているのを耳にしたものである。

「依頼」の意では、平叙文に用いることもある。

(18) She got up and went into the kitchen. “Want a drink?” she called.

“No, thanks, ” I said, “but *you could* bring me a glass of water.”

—M. Atwood, *The Edible Woman*

時には、慇懃無礼に相手を非難するのに用いられる。これは、しようと思えば出来る筈なのに、という仮定の意味が暗示されるからである。この場合 could にはしばしば強勢がおかれる。

(19) You *COULD* have given me some notice!

ところで、次のような依頼を表わす文を検討してみると、

(20) a. *Will you* tell me the way to the station?

b. *Can you* tell me the way to the station?

c. *Would you* tell me the way to the station?

d. *Could you* tell me the way to the station?

(b) は単に相手の能力を尋ねるものとも解釈できる。過去形を用いた(c) や(d) のほうが(a) や(b) より丁寧であるが、この場合は could を用いるほうが would を用いるよりも丁寧であるとされる。これは(c) と(d) の文の前提が異なるからである。(c) は相手が駅までの道を知っている、したがって相手は道を教えることが出来る、という前提にたっているのに対し、(d) の文は相手が駅までの道を知っているかどうかは前提としていない。「もし

かして御存知でしたら」という気持ちが込められており、それだけ控えめで丁寧になる。

1.3 MAY

May と can は「許可」という意味を共有する。しかし、厳密には can の許可は特定の権威によって与えられるのではないことを表わすのに対し、may の許可は「話し手（あるいは聞き手）にその権限がある」ことを意味する。

(21) *May I smoke here?*

(22) *You may smoke in this room. (=You are permitted [by me] to smoke in this room.) cf.(6)*

疑問文やif節においては聞き手に、平叙文では話し手に許可を与える権限がある。

許可を求める場合、can のほうが使用頻度が高いことはすでに述べた通りであり、may のほうが改まった場面で用いられるのは、may が相手の権限を認めた語であるところに由来すると考えられる。

したがって、相手の許可を求める “*May I ...?*” という発言に対して、機械的に “*Yes, you may.*” とか “*No, you may not.*” などと返事をすることは社交上大変失礼なことになりかねない。自分が相手より上に立つことを自ら宣言するようなことになるからである。このような場合に、肯定の応答としては “(Yes,) *certainly,*” とか “*Of course,*” “*Sure,*” などが用いられ、否定の場合の返答としては “(Sorry,) *I’m afraid (you can’t).*” などがよく用いられる。⁴⁾

許可を与える “*You may*” と、禁止を表わす “*You may not*” の使用例を小説から紹介する。まず次例は、秘書が訪問客に対して “*You may...*” と言っている場面である。

(23) *She picked up the telephone. “Mr. Huggins is here to see you, Mr. Murry.” A moment later she put it down, a new respect*

coming into her voice. “*You may go right in, sir.*”

—H. Robbins, *Memories of Another Day*

この場合、秘書は自らの権限で許可を与えているのではない。彼女の許可発言は、電話の向こうにいる上司の権威を借りたものと解すべきである。

次はリビアの駐英大使 (Mr. Kadir) と英国外務大臣 (Charles) が外交上の問題をめぐって激しい応酬をしている場面である。

(24) “Her Majesty’s Government wishes to make it abundantly clear to your government,” began Charles, not allowing the ambassador to continue, “that we consider the act of boarding and holding Her Majesty’s ship *Broadsword* against her will as one of piracy on the high seas.”

“*May I say — ?*” Mr. Kadir again.

“No, *you may not*,” said Charles.

—J. Archer, *First Among Equals*

外務大臣は大使に口をはさむ隙を与えないで、激しく相手国の行為を非難しているのである。

この2例のように、ごく限られた場面においてのみ “*You may (not)*” が用いられるのである。

1.4 MIGHT

May の過去形である might は一層控えめな (tentative) 表現となるが、この might を用いた「許可」を求める疑問文に might を使って答えることは出来ない [Swan, 1980:131]。

(25) “*Might I trouble you for a light?*” — “You $\left\{ \begin{array}{c} \text{may} \\ * \text{might} \end{array} \right\}$ indeed.”

また, Quirk *et al.* (1985:223-224) は次のような表現は “apparently obsolescent” で、稀であるという。

(26) *Might I ask whether you are using the typewriter?*

(27) *Might I ask you how you learned of it, Doctor?*

—I. Fleming, *The Property of a Lady*

既にみたように、許可を求める表現としては may でさえ、改まった語であるのに、それをさらに過去形に移した might の使用が稀であることは容易に推測できる。

この might が「助言」、「提案」、「依頼」、「命令」をするのに用いられる。

(28) Duncan looked at her with a sardonic smile. “Well, now you know what it’s like for me at home.”

“*You might* move out,” she suggested.

—M. Atwood, *The Edible Woman*

(29) “My name is Mrs. Evelyn Heimdall. Mr. Dancer doesn’t know me, but *you might* tell him that the Reverend Perry Stone suggested I call.” —L. Sanders, *The Loves of Harry Dancer*

これらの意味では may は用いられない。Thomson & Martinet (1986:249) は “You might...” は “casual request” に用いられ、親しい、くつろいだ場面で用いられるが、それ以外の場合には乱暴な表現である、という。

時には慇懃無礼に相手を非難するのに might が用いられることがある。この場合、might にはしばしば強勢がおかれる。

(30) You *MIGHT* ask before you borrow my car.

1.5 MUST

Must は話し手（疑問文や if 節では聞き手）による「強制」を表わす。すなわち「主観的な義務」を意味する。

(31) I *must* be leaving now.

(32) *Must* you leave so soon?

この must が you と共に用いられると、相手に対する皮肉になることがある。この場合の must は強勢を伴って発話される。あなたはそこまでしなければ気が済まないのですか、という含意がある。

(33) *MUST* you make that dreadful noise?

(34) If you *MUST* behave like a savage, at least make sure the neighbours aren't watching.

これに対し、疑似的法助動詞の have (got) to は外部の支配力または周囲の事情から生じる「客観的義務 (external obligation)」を表わす。

(35) You *have to* be back by ten o'clock. (=you are obliged to...) 少なくとも、強制者が誰であるかについては特定しない表現である。

さて、前に挙げた主観的義務を表わす *must* を含む (3) のような文が、なぜ丁寧な「勧誘」表現になるのであろうか。

(3) When you come to the States, you *must* come and see us.

(36) "At least you *must* be our guest this evening. Another cognac, Monsieur Chavel?" — G. Greene, *The Tenth Man*

このような *must* の使用について、Lakoff (1972) は例文 (37) を挙げて、以下のように説明している。

(37) a. You *must* have some of this cake.

b. You *should* have some of this cake.

c. You *may* have some of this cake.

パーティーの席で、女主人が自ら作った（または自分で選んだ）ケーキを客に勧める場合を想定してみよう。*Must* は相手の意志（好き嫌い）に関係なく、発話者の意志を押しつけるものである。にもかかわらず、この場合 (a) がもっとも適切で、(b) は乱暴 (rude) な表現で、(c) は最も丁寧さに欠ける。この場合、次のような解釈な段階を踏んでみると分かりやすい。

Must の適切な使用場面には、以下の条件が満たされていることが必要である。

(38) a. 発話者は表層上の主語 (you) より高い地位にある。

b. 相手にとって、言われた事は自分の意志に反することである。

c. もしも聞き手が言われた通りにしなかったら、何か都合の悪い (untoward) なことが起きる。

さて、パーティの招待者である、この女主人は客に対してケーキを勧める権限を持っている。自分が焼いた（または選んだ）ケーキであるから、客には権限がない。条件（38a）は満たされている。次に、客は、差し出されたケーキを食べたいと思うが、自分のほうからは手を出さないであろう。勧められない限り手を伸ばすことは自分の意志に反する。条件（38b）も満たされている。ここで話し手（女主人）は相手に食べることを強制する。客の選択権を奪うことによって、客に遠慮なくケーキを食べる機会を与える、というのが、この *must* の機能である。

この場面で（37c）の *may* が不適切なのは、すでに見たように *may* は「相手が既にそうしたいと望んでいることを、高い地位にいる人が許可する」という意味を持つからである。客に対し、「あなたはこのケーキを食べたいと望んでいるのだから、私はそれを許可します」ということになるので *may* は使えない。

（37b）の *should* が不適当である理由は1.7で述べる。

1.6 SHALL

Shall は話し手の意志によって主語が「束縛」を課せられることを表わすが、現代英語、特に米語において *shall* の使用は日常表現の中では減少傾向にある。

二人称または三人称主語と共に用いられ、話し手の「弱い意志（*Willingness*）」を表わす *shall* の使用について、Leech（前掲書）は、人を見下す含みがあり、ペットや子供に対して使う以外は稀であるという。

（39）He *shall* be rewarded if he is patient.

（40）You *shall* stay with us as long as you like.

また、話し手の「強い意志（*insistence*）」を表わす、次のような文は話し手の尊大さ（*strong imperiousness*）を表わすものであり、現在では既にみた *must* や “*democratic imperative*” の *can* を好む傾向がある、という。

（41）You *shall* obey my orders!

(42) No one *shall* stop me.

Close (1977:117) は、(43)のような言い方は稀であり、代わりに (44) のような表現が用いられると指摘している。

(43) *Shall the waiter serve coffee now?*

(44) a. *Do you want the waiter to serve coffee now?*

b. *Would you like the waiter to serve coffee now?*

現在では、shall は日常表現の中においてはもっぱら一人称主語と共に用いられた疑問文である “Shall I...?” と “Shall we ...?” に使用が限られている。これはいずれも相手の意志を尋ねる「提案」表現であり、相手に決定権あるいは選択権 (option) を与える敬意表現のひとつである。

(45) *Shall I open the window?*

(46) *Shall we go, or do you want to stay longer?*

ところが、Quirk *et al.* (1985:230-231) は、この用法でさえ今日ではしばしば次のような表現で置き換えられるという。

(47) *Would you like us to deliver the goods to your home address?*

(48) *What should we do this evening? Should we go to the theatre?*

同時に、このような言い換え表現は典型的な米語用法であるとも述べている。

なお (45) のような発話に対して、shall を使って答えることは出来ない [Bolinger, 1977:187]。

(49) Shall I let him in? — Yes, $\left\{ \begin{array}{l} \text{do} \\ \text{let him in} \\ * \text{you shall} \end{array} \right\}.$

1.7 SHOULD

Should は shall の過去形であるが、shall とは異なる意味を持つ。should は「義務」を表わす。たいていの場合、疑似的法助動詞の ought to もほぼ同じような意味を表わすが、should によって表わされる義務が主観的であるのに対し、ought to は「より客観的な義務」を表わす。法律や規則など

によって、そうしなければならない、という含みがある。

(50) You $\left\{ \begin{array}{l} \text{should} \\ \text{ought to} \end{array} \right\}$ go and see Mary some time.

(51) You $\left\{ \begin{array}{l} \text{?should} \\ \text{ought to} \end{array} \right\}$ go and see Mary tomorrow, but I don't think we will.

(51) の文で should の使用が不適切なのは、自分で助言をしておきながら、それに従うつもりがないと言明しているからである、と Swan (1980:50) は説明する。

また、should は ought to に比べると弱い強制力しか持たず、must や have to よりもはるかに弱く、⁵⁾「助言・提案」の意になる。

協道にそれるが、次例は ought to と have to の意味の違いを示すものである。

(52) "You ready for a brandy? I am."

Kimberly hesitated....

"I'd really to , Jack, but I *ought to* get back."

"*Ought to* or *have to*?"

"*Have to*, really. Work I've still got to do tonight. And I *have to* be up early tomorrow...."

—B. Whol, *The China Syndrome*

さて、元に戻って、「助言・提案」の should の例をみる。

(53) You *should* go and see the Star Wars—it's a great film.

強制力はかなり弱くなっているのに、けっして日本語の「... すべきである」とは等価ではないことに注意しなければならない。

先に must の項で、客にケーキを勧めるのに should を用いた (37b) は rude であると指摘した。これはせっかく客に食物を勧めるのに強制力の弱い語を用いた為であり、勧めている人の誠意が十分にこもっているとはいえないからである。「このケーキ食べてみたら」と言われたのでは、客は自由

に手を伸ばす訳にはいかないのである。⁶⁾

1.8 WILL

Will は、主語の意志を表わす。待遇表現としては、特に “Will you...?” の形で用いられ、相手の意志を尋ねる形で、「依頼」、「招待」、「丁寧な命令」を表わす。

(54) *Will you pass the salt, please?*

(55) *Will you have some more wine?*

(56) *Will you come this way, please?*

この項の始めでも注意したが、助動詞の意味はその場面の状況により決まる。その発話の音調にもよる。例えば、次の (57) は脈絡により (58) のいずれにも解釈できるし、それ以外の読みも可能である。

(57) *Will you come back early today?*

(58) a. I want you to come home early today. I want to go out for dinner with you.

b. I don't want you to come home early today. I have a dinner appointment with an old friend of mine.

否定疑問文 “Won't you ...?” は「招待」の気持ちを強めるのに用いられる。

(59) *Won't you have some more wine?*

これは “Will you have some more wine?” よりも、勧める気持ちがはるかにこもっている表現である。本稿では詳しくふれないが、一般に否定疑問文は断定の度合を弱めるので、肯定疑問文よりも一層丁寧になる。

1.9 WOULD

Would は will の過去形であり、will の持つ主語の「意志」を控えめに表現する。

“I would like (to)...” の形で、主語の希望を述べるのに用いられる。これ

は、“I want (to)...”のような、あからさまに意志や希望を述べる表現に代わって好まれる。

(60) *I would like a cup of tea.*

(61) *We would like to go home now.*

改まった場面では *should like (to)* も用いられるが、主として英国用法である。

(62) “*I should like to know who you are, lieutenant.*”

“Kalema Worq. Lieutenant Imperial Guard. You are under arrest.”
—T. Allbeury, *The Girl from Addis*

また、*would* は平叙文で「申し出・提案」を表わす。

(63) *I would do that for you.*

ここでは仮定法を用いることにより、相手の反応を伺う姿勢が見られ、それだけ控えめな申し出となっている。

疑問文に用いられると、丁寧な「依頼」を表わす。

(64) *Would you pass the salt?*

(65) *Would you open the window, please?*

もちろん、疑問文は相手の意志を丁寧に尋ねるのに用いられることは言うまでもないが、次例にみるように、これは単なる疑問ではなくて、相手に勧める表現である。

(66) *Would you care for some coffee?*

(67) “*Would madam like to try the striped one?*” The salesgirl had reappeared.
—L. Deighton, *XPD*

1.10 その他

日本人がややもすると乱用する傾向のある表現のひとつに助動詞と同じような働きをする *had better* がある。これは、本来「... するほうがよい」という比較の意から派生して、「すべきである...」という意味をあらわす。しかし、この表現は、*better* を強く発音した場合には「さもないければ」とい

う脅迫の含みを持つので、相手への助言としては (68a) よりも (68b) のような他の表現を用いるほうが無難である。

(68) a. *You'd better do it.*

b. *I suggest you do it.*

2

前項では、個々の法助動詞について待遇表現との関連をみてきた。こんどは角度を変えて、語用論的な意味の面から再整理を試みたい。

「助言」「提案」「依頼」「命令」などと呼ばれる行為は、はっきりと境界線を設けることがきわめて難しい。言葉によって表現された、ある行為が話し手にとっては利益 (benefit) になり、聞き手にとっては負担 (cost) になるような場合は、通例「命令」や「依頼」になる。これに対し、「助言」はその行為を実行すること自体は聞き手の負担になるけれども、その結果は同時に聞き手にとって利益にもなるのが通例である。しかし、助言の内容によっては聞き手のみならず、話し手にとっても利益になることもある。これは「提案」と呼ばれる行為においても同じである。

また、我々は日常生活の中での対人関係において直接「命令」することは少ない。たいていは「依頼」とか「提案」「助言」といった言語形式を用いて自分の欲求・希望をかなえようとする。したがって、以下に設定する区分は厳密なものとはなり得ないことを予め認識しておく必要がある。

2.1 PERMISSION

まず、「許可を求める」表現を考えてみる。もっとも informal であり、日常的によく用いられる形としては “Can I ...?” があり、改まった場合の表現としては “May I...?” があり、さらに改まった場合には “Might I...?” が用いられる。この中間に “the most generally useful form”⁷⁾ として “Could I...?” がある。これを丁寧な順に並べると次のようになる。

(69) a. *Might I use your pen?*

- b. *May I use your pen?*
- c. *Could I use your pen?*
- d. *Can I use your pen?*

2.2 REQUEST

上でふれた許可を求める行為は一種の「依頼」であるが、通例「依頼」(request)には次のような表現が用いられる。

- (70) a. *Could you take me home?*
b. *Would you take me home?*
c. *Will you take me home?*
d. *Can you take me home?*
e. *I'd like you to take me home.*
f. *You might take me home.*

上に掲げた表現には様々な variations が可能である。たとえば、“Could you ...?”に possibly を付け加えて “Could you possibly ...?” とさらに丁寧な表現を用いることも出来るし、否定疑問文にして、“Couldn't you ...?” という表現で依頼することも出来る。また依頼しても無理かも知れないが、という気持ちを表わすのに “You couldn't wait five minutes, could you?” という形も用いられることがある。⁸⁾

2.3 ADVICE

「助言」(advice) に用いられる助動詞表現には、“You might ...” や “You had better ...”などの他に “You should ...” や “You must...” のように「義務」を前面に押し出す表現などがある。

- (71) *You might as well ask him.*
(72) *You had better take your umbrella with you.*
(73) *You should ask your doctor.*
(74) *You must listen to your father.*

2.4 COMMAND

すでに述べたように、命令文を用いて、相手にして何かを欲しい気持ちをストレートに表現することは社交上避ける場合が多い。相手の「義務」を喚起したり、「助言」を与えたり、「提案」や「依頼」の形式を借りて目的を果たそうとする。

通例、命令文が一番直接的であるとみなされるが、次例にみるように (a) のほうが (b) の命令文より丁寧さに欠ける。

(75) a. You will take me home.

b. Take me home.

これは will が prediction を表わし、必ずそうなる、という話し手の信念を意味し、“I am absolutely sure you will obey,” の意になるからである [Leech, 1983:121f]。

「依頼」の形をとって「命令」をする場合は以下のような表現がよく用いられる。

(76) a. *Could you wait five minutes?*

b. *Would you wait five minutes?*

c. *Will you wait five minutes?*

d. *I would like you to wait five minutes.*

なお、次の (77) のように命令文の後に “will you?” などを付け加えるのは、親しい間柄ので用いられる親愛表現であり、(76c) とはスピーチ・レベルが異なる。

(77) Shut the door, *will you?*

2.5 PROHIBITION

1 では「禁止」を表わす助動詞表現についてはふれなかったが、これは禁止という行為は一種の「命令」であり、上にみたように命令は間接的な表現で表わすことが多いからである。一般的には、“You can’t” や “You may not” のように助動詞の否定形を用いて禁止を表わすことが出来る。

2.6 SUGGESTION

「提案」(suggestion)は典型的には“Shall we ...?”の形で表わされるが、could や mightなども用いられる。

(78) “*Shall we* have coffee at my place?” Charles asked after an unhurried dinner. —J. Archer. *First Among Equals*

(79) “*We could* go out to the Pompano Fashion Squares,” Sally suggesets. “Jordan Marsh is having a sale on swimsuits.”

—L. Sanders, *The Lovers Of Harry Dancers*

(80) “Do you have time today? We didn’t talk long enough last night, and I thought if your schedule allows, *we might* have lunch. And dinner maybe?”

—R. Bach, *The Bridge Across Forever*

2.7 INVITATION

「勧誘・招待」(invitation)には次のような助動詞表現が用いられるが、しばしば「助言」や「提案」の形式をも用いる。

(81) “*You must* come and see us again soon,” he said, “Clara has so few people she can really talk to.”

—M. Atwood, *The Edible Woman*

(82) *Will you have* a drink?

(83) *Would you like* a coffee?

しかし、“Do you want ...?”は invitation の表現としては、ふさわしくない。

また次のような勧誘動詞も用いられる。

(84) “*You will* stay for dinner, *won’t you?* You won’t run away?”

—H. Fast, *The Legacy*

2.8 OFFER

「申し出」(offer)を表わす表現としては次のようなものがある。

(85) *I can* ask around for you.

これは canが、それだけの能力または行動の自由を持っている、の意を表わすからである。

この他、次のような表現も用いられる。

(86) *I could* drive you home.

(87) *Shall I* call him now?

(88) *I will* do the dishes.

3

言語形式における丁寧さ (politeness) の決定要素を研究した、短いが興味ある論文として Carrell & Konneker (1981) がある。二人は 115人 (英語の母国語話者42名, 外国人の英語学習者73名) を対象に実験を行ない、その結果を次のように述べている。

Mood contributes the greatest to the politeness hierarchy, in the order: interrogative — most polite; declarative — next most polite; imperative — least polite.... Presence of modals contributes next to politeness; modals don't add much to the politeness of the already-very-polite interrogative, but they do contribute more to the politeness of the not-as-polite declarative. Finally, if the modal is past tense, this adds a small additional degree of politeness. (p.27)

また, Leech (1983:137)は、聞き手にとっての負担 (cost))が大きく、話し手と聞き手の社会的距離が大きくなればなるほど、相手に選択権を与える表現を用いる必要が大きくなり、それだけ間接的に表現する必要が生じると述べている。

これらの意見をまとめると、相手に何かをさせようとする場合には、選択

の余地を与えない命令文よりも平叙文を、そして平叙文よりもさらに拒否する自由を相手に与える疑問文を用いて、間接的な表現手段に訴えるほうが丁寧である。さらに、助動詞、特にその（仮定法）過去形を使用することにより、現実から一步引いた世界に訴えて控えめな表現が生まれるということになる。

これに関連して、興味深い観察をした例を最近の小説から引いておく。

(89) "Go through and make sure Stein boards, would you? I'll arrange that someone meets him at the other end. Call me again only if he does not board that flight. Will you do that for me?" Parker had acquired *the North American habit of making his demands sound like polite inquiries*. "Yes," said Breslow reluctantly. —L. Deighton, *XPD*

丁寧さ (politeness) について考える時に注意しなければならないことは文化は画一的なものではない、ということである。ある文化では丁寧であり、礼儀にかなっているとされる言動が、他の文化では粗野で乱暴であるとみなされることがある。これまで取り上げてきた待遇表現の使用も英語を使用する文化という脈絡の中で考察する必要がある。

日本の社会では、相手を敬い、丁寧な言葉を使用することが礼儀に適った行為と見なされる。ところが、英語圏（少なくともアメリカ社会）においては、堅苦しい礼儀を避け、相手を自分の仲間として扱うことが社交上の正しいルールとみなされる場合がある。

Lakoff (1973;1975) は Rules of Politenessとして次の3原則を挙げる。

1. Formality: Don't impose
2. Deference: Give options
3. Comaraderie: Be friendly

そして、日本の社会では2の原則が強く働くが、アメリカでは3の原則が強いという。このことは、もし日本人がアメリカ人の家庭に招待されたりすると、アメリカ人の親しく振る舞う態度に戸惑いを覚えることがあり、逆の場

合には日本人のあまりにも丁寧な物腰にアメリカ人がカルチャー・ショックをうけるかも知れないことを予測させてくれる。

Informalな人間関係を重視する社会では、あまり丁寧な言葉を使用することはかえってマイナスの作用をする。言うまでもなく、親しい友人、恋人、家族などの間で丁寧表現を用いることは場違いであり、informalな表現、親愛表現を使用するのが適切である。

Lakoff (1972) は、一般には次のように下にあげた文ほど丁寧さの度合いが減少するという。

- (90) a. Come in, won't you?
- b. Please come in.
- c. Come in.
- d. Come in, will you?
- e. Get the hell in here.

しかし、話し手が自宅の前でセールスマンを招き入れる時には(a)や(b)を使うのがふさわしいが、友人を招き入れる時は(c)のように言うのが普通であり、(a)や(b)は押しつけがましい (forced hospitality) という。

また, Bolinger (1977) は,

If I am sampling a food and say to you *Like a taste?* you are apt to interpret my invitation as less ceremonious and hence more sincere than if I say *Would you like a taste?*

と述べている。

待遇表現の使用には、言語形式の持つ意味だけでなく、その語用論的な意味をも理解することが不可欠であるが、上に述べたような文化の違いも心得ておく必要がある。1 および 2 で考察した諸表現の丁寧体を使用することが必ずしも適切とは限らない脈絡が存在することを知っておく必要がある。くだけた親愛表現が必要とされる所以である。言葉は衣服と同じで、その場にふさわしい自己表現の方法を心掛けなければならない。

〔注〕

1) 井出 (1982:111)

2) 安藤 (1983:173)

3) *ibid.*, 210。なお、厳密には、この過去形は假定法過去に由来するもので、一般的には現実性の度合いを弱めることによって、表現を控えめにするという効果がある。

一般に現在時（あるいは未来時）の事に言及するのに過去時制を用いるのは、話し手がその発言内容をすでに過去のものとして、現在はそれにこだわっていない、という控えめな態度を表わすことになり、丁寧表現となる。

例えば、相手を誘う時に用いる、

(a) I *wonder* if you can come to the party next Friday.

(b) I *wondered* if you could come to the party next Friday.

(c) I *was wondering* if you could come to the party next Friday.

のような文において、過去形を用いた(b)のほうが直接的な(a)よりも控えめで丁寧な表現になる。さらに(b)よりも(c)のほうが、より丁寧な表現となるのは、進行形を用いることにより、そのような考えが一時的に頭に浮かんだにすぎない、と言う意になり、話者は現在ではこだわってはいないので、もし都合が悪ければ、遠慮しないで断って下さい、という含みを持つことになるからである。

4) Blundell *et al.* (1982:120-123)

5) *LDCE* (sv. SHOULD)

6) 自分の所有物でないものを人に勧める場合に *should* を用いるのは差し支えない。したがって、招待を受けた客が、出されたケーキを見て、他の客に “You should eat some of this cake.” というのは自然である。

7) Thomson & Martinet (1986:246)

8) *ibid.*, 247

参 考 文 献

- 安藤貞雄 (1983) : 『英語教師の文法研究』, 大修館書店
- Blundell *et al.* (1982) : *Function in English*, OUP
- Bolinger, D (1977) : *Meaning and Form*, Longman
- Carrell, P. L. & B. H. Konneker (1981) : "Politeness: Comparing Native and Nonnative Judgments", *Language Learning*, Vol.31, No.1, 17-30
- Close, R. A. (1977) : *English as a Foreign Language*, 2nd Ed., George Allen & Unwin
- 井出祥子 (1982) : 「待遇表現と男女差の比較」, 國廣哲禰 (編)『文化と社会』日英語比較講座第5巻, 大修館書店, 107-169
- Lakoff, R. (1972) : "Language in Context", *Language*, Vol.48, No.4, pp.907-927
- _____ (1973) : "The Logic of Politeness; or, Minding your P's and Q's", *CLS* 9, 292-305
- _____ (1975) : *Language and Woman's Place*, Harper & Row
- Leech, G. N. (1971) : *Meaning and the English Verb*, Longman
- _____ (1983) : *Principles of Pragmatics*, Longman
- Quirk, R. (1982) : *Style and Communication in the English Language*, Edward Arnold
- Quirk *et al.* (1985) : *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman
- Swan, M. (1980) : *Practical English Usage*, OUP
- Thomson, A. J. & A. V. Martinet (1986) : *A Practical English Grammar*, 4th Ed., OPU

(1986. 9. 24 受理)